
最強イタリア軍

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強イタリア軍

【Nコード】

N5930U

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何とドイツやフランスよりも強いと思われていたイタリア軍。その戦いぶりは。ヘタリアでも有名なあのイタリア軍を書かせてもらいました。本当に弱かったです。

第一章

最強イタリア軍

「閣下、大変です！」

「どうした」

アドルフ・ヒトラーは総統官邸の執務室において部下の報告を受けていた。丁度フランスとの戦いの行く末が決定的になった時だ。勝利のせいで彼は機嫌がよかった。その彼への報告であった。その報告はというと。

「イタリア軍がフランスに宣戦布告しました」

「そうか。ではフランス南部のフランス軍は壊滅だな」

ヒトラーは確かな笑みを浮かべて述べた。

「我々に敗れた彼等には余力はない。それではな」

「いえ、それが」

ところがだった。部下の顔がここで曇るのだった。

「あの、宜しいでしょうか」

そしてだ。ヒトラーに対して怪訝な顔で言ってきたのである。

「確かにフランス軍は最早死んだも同然ですが」

「何かあるのかね？それでも」

「ですがイタリア軍はです」

「まさかと思うが足踏みしているのではないだろうな」

ヒトラーにしては珍しくその言葉に冗談を入れた。今のフランス軍に負ける筈がない、彼は実に気楽に考えて冗談を入れたのである。

「それとも何かね。イタリア軍は二ースに入ってバカンスを楽しんでいるのかね？」

「いえ、二ースどころかです」

ところがだというのであった。

「その。フランス軍にです」

「彼等に？」

「負けています」

こう言うのであった。

「それもあり。国境にまで追いやられようとしています」

「馬鹿な、そんな筈がない」

ヒトラーは驚いた顔になった。その報告を否定しようとする。

「今のフランス軍にだ。負ける要素があるのか」

「しかしです。実際にイタリア軍はです」

「負けているのか」

「その通りです」

部下もだ。驚きを隠せない顔だ。信じられないというのだ。

「今のフランス軍にです」

「馬鹿な、有り得ない」

流石のヒトラーもだ。啞然となっている。

「あの瀕死のフランス軍にか」

「どうされますか、それで」

部下は真剣な顔でヒトラーに尋ねた。

「ここは」

「もうすぐ戦争も終わりだ」

だが、だった。ヒトラーの言葉じゃ冷静だった。

落ち着いた声でだ。こうその部下に告げた。

「ここはイタリア軍に援軍を出すよりもだ」

「戦争を終わらせることですね」

「そうだ。戦争を終わらせる」

また言う彼だった。

「フランスを降伏させよう」

「わかりました。それでは」

こうしてドイツはフランス自体を降伏させ戦争を終わらせた。かくしてイタリア軍は窮地を救われた。あと少しでイタリアにまで攻め込まれるところであった。

しかもだ。それで終わりではなかった。何とだ。

いきなり何を思ったのかユーゴスラビアやギリシアに攻め込みだ。負けた。

あまりにも酷く負けてた。ドイツ軍は止むを得なく援軍を出した。見ればイタリア軍は捕虜を異様に出していた。

これにはユーゴで彼等と戦っていたチトー率いるパルチザン達も呆れた。しかもだった。

彼等はだ。呆れながらこう話をするのだった。

まずはだ。ドイツ軍の捕虜達を見てだった。彼等は縛られていても反抗的な態度である。負けてはいないといった顔でだ。そこにいた。

「頭にくるな」

「ああ、あそこまで反抗的だとな」

「拷問しても絶対に何も喋らないな」

「糞っ、こうなったら」

「こつちも容赦しないでおこうな」

「ああ、ソーセイジ野郎共が」

彼等はドイツ軍の捕虜達を憎しみの目で見ていた。そのうえで言うのであった。

「戦っても強いしな」

「捕虜になっただけでこんなのだしな」

「この連中だけは許すか」

「何があってもな」

彼等に対してはこうであった。そのうえでだ。

ドイツ軍の捕虜達よりも遥かに多い、何倍もいるイタリア軍の捕虜達は固まってがたがた震えている。パルチザン達が少し目を向けるとだ。

第二章

「ゆ、許してくれえええ！」

「お、俺を殺しても何もならないぞ！」

「俺はいいイタリア人だよ！」

「ベオグラードに親戚がいるんだ！だから！」

「殴らないでくれ！拷問は勘弁してくれ！」

「大事なことは喋る！だからな！」

「殺さないでくれ！」

「こんな調子であつた。」

「あんた達には何もしないから！」

「な！一緒にパスタ食べようじゃないか！」

「ほら、ワインも飲んで！」

「だから！命だけは！」

「勘弁してくれえええええ！」

泣き叫びながらだ。命乞いをするのであつた。そんな彼等を見てだ。

パルチザン達だ。やれやれといった様子であつた。そうしてだ。彼等についてはだ。こう話すのだった。

「まあこの連中はな」

「そんなに厳しくないでいいな」

「というか何か可哀想になるな」

「ああ、特に何もしないでやるか」

「そうするか」

こうしてであつた。イタリア軍については彼等も優しかった。本当に彼等に対しては鬼のパルチザンもだ。穏健な応対であつた。

イタリア軍の戦いは続く。尚もであつた。

今度はアフリカまで出掛けた。何故か戦線を拡げることには熱心だ。だが何処でも勝利よりも敗北が、そして捕虜を出すのだった。

むしろだった。捕虜になるよりもだ。

自分達からだった。捕まりに行くのであった。砂漠においてだ。
イタリア軍の将兵達がだ。あちこちをうろつろつとしていた。そう
してだ。

兵士の一人がだ。指揮官である将校に尋ねていた。

「あの、大尉」

「何だ？」

「イギリス軍は何処ですか？」

敵軍の位置を尋ねるのだった。彼等が今戦っている相手だ。

「近くにいるんですよね」

「その通りだ」

「けれど。見ませんね」

「そうだな。いないな」

大尉もそれを話す。

「何処に行ったんだ」

「このままじゃ俺達やばいですよ」

「そうですよ」

兵士の顔に不安が漂う。

「ドイツ軍も傍にいますし」

「このままですと」

「戦争になります」

「まずいですよ」

こう話す彼等だった。

「戦争になったらもう」

「俺達戦わないといけませんからね」

「だから今のうちにですよね」

「何とかしないと」

「そうだ、イタリアの男が戦うのはな」

ここで大尉は熱弁を振るう。その熱弁の内容とは。
「惚れた女の為だぞ、わかってるな」

「それに自分の住む町や村の為」

「その為ですからね」

「だから」

戦いたくはないというのだ。少なくとも今の敵とはだ。

そんなことを話しながら砂漠を見回してだ。遂にであった。

探し求めていたイギリス軍の陣地を見つけた。そしてだ。

彼等は白旗を掲げてそのうえで両手を挙げてだ。全力で陣地に突撃する。イタリア訛りの英語でだ。大声で叫びながら。

「降伏する！」

「保護してくれ！」

「捕虜としての待遇を要求する！」

こう叫んでそのうえでだ。降伏しようとする。しかしであった。

そのイギリス軍の陣地からだ。こう返事が返ってきた。

「帰れ！」

返事はこうしたものだった。

「今戦闘準備で忙しい！帰れ！」

「えっ、帰れって！？」

「じゃあ俺達に戦えっていいのか！」

「イギリスの奴等は鬼だ！」

「何でそんなこと言うんだ！」

彼等はイギリス軍の返事にだ。悲嘆のあまり砂漠の上にしゃがみ込んでしまった。そのうえで泣き叫んでだ。抗議するのだった。

第三章

「折角捕虜になりに来たのに！」

「何でなんだ！」

「白旗が見えないのか！？」

「銃もほら！捨てるぞ！」

実際に銃を砂漠の上に一斉に捨ててみせる。整備のことは考えていない。

「だから捕虜にさせてくれ！」

「降伏したいんだ！」

「戦いたくないんだよ！」

「そんなに言うなら向こうのアメリカ軍の陣地に行け！」

またイギリス軍から返事が来た。

「そこで好きなだけ捕虜になれ！連絡はしておく！」

「えっ、じゃあイギリス軍のまずい飯を食わなくていいのか！」

「それはいい！」

アメリカ軍の捕虜になると聞いてだ。一斉に顔をあげてだ。彼等は口々にこう言った。

「じゃあ今から行くか！」

「ヤンキーのところでステーキを食うか！」

「そうしよう！これで捕虜だ！」

「戦わずにただで飯が食えるぞ！」

こうしてであつた。彼等は嬉々として砂漠を駆けてだ。アメリカ軍の陣地の位置も確かめないで捕虜になりに行った。彼等が搜索に出ていたアメリカ軍に投稿したのは真夜中のことであつた。

外での戦争はこんな有様だつた。そしてだ。

戦局はイタリア軍にとって悪化してだ。シチリアからイタリア本土に上陸された。ここでもドイツ軍は彼等に悩まさせられるのであつた。

教会がだ。いきなり爆発したのだ。

「な、何だ!？」

「落雷で爆発しただと!？」

「教会がか!？」

「避雷針はあつただろ!」

この時代では最早常識のことだ。当然イタリアでもだ。

「それで何で教会が爆発したんだ？」

「燃えたんじゃないくて爆発したとは一体」

「何があつたんだ!？」

「連合軍の爆撃か？」

こんな言葉も出た。

「まさか。雨の時を狙つてか」

「馬鹿を言え」

だがそれは否定された。すぐにだ。

「幾ら連合軍でもそれはできないぞ」

「雨だとやっぱり無理か」

「あの連中でも」

この時代はまだ全天候の航空機はなかったと言つてもいい。それが可能になるのはこの戦争からまだ先のことであつたのだ。

「じゃあどうしてなんだ？」

「教会の爆発なんて尋常じゃないぞ」

「イタリア軍が何かやつたのか？」

「また奴等か？」

彼等も自然とこう考えるようになった。そしてその予想は正解だった。何とだ。

イタリア軍はだ。教会の中に火薬を保管しておいたのだ。しかもだ。

教会にだ。避雷針を置いていなかった。肝心のそれをだ。

それを知つてだ。ドイツ軍の将兵達はこれまた啞然となった。

「何で火薬を教会に置くんのだ？」

「何故避雷針を置かないんだ？」

「あの連中今度は何考えてたんだ」

「一体」

その謎はだ。他ならないイタリア軍の将兵達から話された。その理由は。

「だから。教会だからだよ」

「教会は神様の場所だよ」

「だから。神様が守って下さるから」

「それでなんだよ」

「だから避雷針を置かなかったんだ」

「火薬も保管したんだ」

それでだというのであった。

「いやあ、けれどね」

「神様は守ってくれなかったね」

「神様も厳しいよ」

「全くだね」

「せちがらい世の中だよ」

いぶかしみながらこんなことを言う彼等にだ。ドイツ軍の将兵達はこれまた呆れるしかなかった。そうしてソーセージに黒パン、ジヤガイモという質素な食事を採りながらだ。愚痴めいたことを話すのだった。

第四章

「あの連中、何処まで駄目なんだ」

「戦争やる気あるのか？」

「何考えてるんだよ」

「フランスでも東部戦線でもユーゴでもアフリカでも」

彼等はソ連との戦争でもやらかしているのだった。しっかりとだ。

「へまばかりしやがってな」

「戦えば逃げるしな」

「それどころか自分達から降伏するしな」

「ちよつと怒ったら泣いて謝るしな」

しかもだ。これだけではなかった。

「兵器はカスだしな」

「何だよ、あの赤い手榴弾」

「こっちの方が危険だったの」

「整備も悪いぞ」

とにかくだ。不満が尽きないのだった。

「機甲師団って言っても。戦車がなかったりするしな」

「車があつたらそれで逃げる」

「碌な装備を持ってない相手に近代兵器で惨敗する」

「しかも戦場で美味しいもの食おうとする」

「將軍なんか専属のコックまでいるぞ」

「無駄に水使うしな」

「それもするのだった。」

「今だって。 Pasta 食ってるしな」

「あれっ、砂漠でも Pasta 食ってたんじゃないのか？」

一人がこのことを話した。冷えたまずいソーセージを食べながら。

「あの連中それもとってたんじゃないのか？」

「いや、それはなかった」

「流石にな。無理だったからな、パスタをあそこまで保管するのは」
それで諦めたというのである。食べられないからだ。

「それはなかったからな」

「ああ、そうなのか」

「流石に砂漠では食わなかったか」

「今は食っててもな」

たつぷりと時間をかけてだ。パスタや色々なものをだ。戦場で食べ
ているのである。

だが、だった。ここでさらにであった。こんな話が出た。

「燃料や弾薬より食い物や酒の備蓄の方が多いいけれどな」

「そっちか」

「そっちの方が多いか」

「道理で。やたら飲み食いしてると思ったら」

「そうだったんだな」

「俺達なんかこんなの食って何とか戦ってるのにな」

冷えたソーセージの他はだ。固い黒パンにジャガイモ、これだけ
は何とか火を通してている。他にはザワークラフトだけである。

そんなものしかない。イタリア軍とは本当に違う。彼等という
とだ。

「パスタに肉に野菜にな」

「柔らかいパンにな」

「しかもワインまである」

「あれが兵隊の食事かよ」

「将校になったらもつと凄くなるしな」

ドイツ軍とはだ。そこが全く違っていたのだ。

それを話していった。彼等是不満を募らせていく。そうしてだ
った。

「ここでも負けたらな」

「ああ、あの連中にも責任があるな」

「頼りになる同盟国が欲しいよ」

「全くだ」

ドイツ軍にしてみればそう言いたいことであつた。そして、彼らが敗れた時だ。イタリアはというと。

何故か晴れ渡つた雰囲気の中にいた。そのうえでこんなことを言うのであつた。

「戦争が終わつたぞ!」

「やつた! 終わつたんだ!」

「俺達は勝つただ!」

「ああ、勝つたぞ!」

こんなことを言う。するとだ。

それを聞いた敗戦に打ちひしがれていたドイツ人達はだ。彼等が何を言っているのかわからずにだ。思わずこう問い返したのだった。

「おい、どういふことだ」

「そうだ。勝つた?」

「何に勝つたんだよ」

「それで」

「だって。今連合国にいるから」

「そうそう、ムッソリーニに勝つたんだよ」

「あの独裁者にな」

彼等は胸を張つてこう主張するのであつた。

第五章

「俺達は勝ったんだ」

「勝って戦争を終わらせたんだ」

「そうしたんだよ」

「何に勝ったんだ」

呆れながら言うしかなかった。ドイツ人にとっては。

「あれだけ負けて」

「戦場で逃げてばかりだったのに」

「それでもか」

「あんた達もよかったね」

だが、だ。イタリア人達はだ。にこやかにドイツ人達にだ。こう声をかけるのであった。

「もう戦争は終わりだよ」

「終わりっておい」

「御前等が言うなよ」

「全くだ」

ドイツ人達は怒った顔で言い返す。

「御前等ずっと負けまくって真っ先に降伏してな」

「日本なんてまだ戦ってるんだぞ」

「ちよつとはあの連中を見習え」

「俺達は負けたけれどな」

ドイツ人達はこう言う。しかしだ。

イタリア人達はどうとだ。能天気なまでの笑顔でだ。そのドイツ人達に見事に切り返す。何とも思っていないといった笑顔だ。

「だから。戦争に勝たなくてもね」

「勝たなくても何だ」

「どうなるっていうんだ」

「国が存続するともいうのか」

「そう言うつつもりか」

「そうだよ。その通りだよ」

まさにその通りだとだ。能気なまま返すのだった。
「実際に俺達ここにいるじゃない」

「戦勝国だよ、戦勝国」

「俺達戦いに勝ったんだよ」

「だから何時勝ったんだ」

ドイツ人はまた言い返した。

「三回のうち五回か八回は負けてただろうが」

「それで何で戦勝国だ」

「そついえは何かそつちにいるけれどな」

「それも訳がわからないな」

「ムツソリーニは死んだし」

正確に言えば頃された。それで死体は宙吊りにされた。

「戦争を起こした本人がね」

「俺達はそれで降伏して。連合国についたから」

「だから俺達戦勝国なんだよ」

「そうなんだよ」

「全く。現金な奴等だ」

「本当にな」

イタリア人達の話聞いてだ。呆れた様に話すドイツ人達だった。

第六章

そしてそのうえでだ。やれやれといった顔で彼等に話す。

「戦場で負けてもか」

「それでも戦争には勝てるんだな」

「どれだけ負けても」

「そうだよ。俺達みたいだね」

「それができるからね」

「大切なのは」

それが何かも話す。

「如何に生き残って国を存続させるかじゃない」

「だから。戦争なんてしなくてもいいんだよ」

「あんな怖い二度としたくないよ」

戦争は怖い。このことは素直に言う。

「けれど。国は残ったから」

「俺達はもうこれでいいよ」

「満足してるよ」

「納得できないな」

「そうだな」

ドイツ人達はそんなイタリア人達の言葉を釈然としない顔で聞いていた。どうしても納得できない。もっと言えば納得できるものがない。

しかしだ。それでもだった。彼等もだ。

そんなイタリア人の言葉を否定しなかった。納得できなくともだ。それでも否定はできなかった。無意識のうちにそうになっていた。

そんな彼等にだ。イタリア人達は陽気にこう言ってきた。

「それならね」

「それなら？」

「それなら。何だ？」

「何だというんだ」

「何か食べない？」

食事をだ。ドイツ人達に勧めるのだった。

「パスタあるよ。チーズもね」

「それとワインもね」

「こっちも戦争の後だからあまり質はよくないけれど」

「どう？一緒に」

「食べる？」

「そうだな」

そう言われるとだった。そのドイツ人達もだ。堅苦しい考える顔になった。だがそれでもだ。そのうえでだ。こうイタリア人達に答えた。

「正直なところ腹が減ってるしな」

「戦場じゃ碌なものを食べていなかったしな」

「パスタか。嫌いじゃない」

「チーズもワインもな」

これが答えだった。そしてであった。

彼等はイタリア人達の誘いに乗った。そのうえで。

「じゃあな。一緒にな」

「食べさせてもらう」

「慎んでな」

「遠慮なんていいよ」

「そんなのいらないよ」

イタリア人達はドイツ人達に気さくに返す。

「一緒に戦った仲じゃない」

「色々と助けてもらったしね」

「だからさ。仲良くね」

「仲良く一緒に食べよう」

「だから御前等一番最初に降伏しただろ」

またこのことを話すドイツ人達だった。彼等の能天気さにはどうしても言わざるを得なかった。

「全く。それで戦勝国側にいてか」

「そう言うか」

「いいからいいから」

「戦争は終わったんだしさ」

「仲良くしよう」

「そうしよう」

そう言われても本当に変わらないイタリア人達だった。そうしてだ。

ドイツ人達にだ。そのパスタやチーズ、ワインを出してであった。彼等と共に食べるのだった。かつての戦友達と共に。そしてそれをだ。何だかんだで受けて一緒に食べることにはやぶさかではないドイツ人達だった。

最強イタリア軍 完

2011・2・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5930u/>

最強イタリア軍

2011年7月4日03時19分発行